

# 英語教育

## ENGLISH CLASSWORK

Vol. 62 No. 4 2010

主幹 佐野 正之

### 巻頭言

#### JETプログラムとは何だったのか

立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科教授 ● 鳥飼 玖美子

2010年5月の「事業仕分け」で、JETプログラムが槍玉に上がった。(財)自治体国際化協会の事業として仕分けの対象となり、「JETプログラムは根本的に体制から改める。23年経過した今日、ALTを廃止すべきである。原点に立ち返って検討すべき」という評価結果となった。JETは23年前に日本の国際化事業の一環として始まった制度であり、世界の若者に日本を体験してもらい理解してもらおうという趣旨は理解できるが、現在の日本はすでに国際化しており、23年前と同じ事業を続けることはいかなるものか。また、外国語教育を助けるALTという位置づけは現状のままでよいのか。英語教育にはそれなりの資格が必要であり、資格のないJETの若者に日本の英語教育を任せてよいのか、というのが見直しの理由である。

JETが1987年に始まった当時は、住まいをどうするか、授業補佐をどのような形でやってもらうのか、とまどいも多く、事実上の「お世話係」になった日本人の英語教員が悩んでいるなどという話題に事欠かなかった。昨年も36か国から4,436名が来日しているとのことだが、JETのALTは、教育は素人なのに経費が高くと、民間業者に委託しての請負ネイティブ教員に切り替えた自治体も多い。ところが、偽装請負になるので日本人教員がALTと打ち合わせたり指示を出したりできないという事態も発生しており、チーム・ティーチングが有名無実になると危惧する声もある。

確かにJETは国際交流を主眼に始まった制度であり、せっかく招くのだから「ついでのこと」に英語教育のアシスタントをしてもらったらどうだろう、ということで始まった中途半端な制度だと言えなくはない。しかしJETは、良くも悪くも日本の英語教育に一石を投じたとも言える。

ALTの役割については、英語教育界も、その可能性と限界とを総括したうえで、日本人教師とチームと組んで英語教育にあたるという視点から、再検討するべきである。

## まとめる力は、足したり引いたりして鍛える！

— 活用のために「型」を教える —

関西外国語大学教授 中嶋 洋一



### 1. 「英語+内容」で「内発的動機づけ」を

「まとまった文章を書くこと」は、PISA型「読解力」(2000年 OECD生徒の学習到達度調査)で、日本の子どもたちの弱点として浮き彫りになった部分である。

「まとまりのある文章を書く」ためには、2つの要素が必要になる。1つは、こだわりをもって書けるように意欲づけることである。2つ目は、文脈を意識させ、相手と目的に応じた書き方ができるようにすることである。

1つ目の「こだわり」は、外発的動機づけ(何かによって強いられること)ではなく、内発的動機づけ(自らの「～したい」という思い)によって生まれることが多い。

人間は経験の動物であり、「成すことによって学ぶ」ことを生き方としている。これは、ことばの習得においても言えることである。

言うまでもなく、ことばの習得には「言語+内容」の2枚看板が必要である。「教科書を先に進める授業」や「言語材料の定着だけに執着する授業」では、「言いたい、書きたい、伝えたい」といった自発的な欲求は生まれにくい。

「内容」がワクワクすること、初めて知ることなら、今まで習ったことを駆使しながら、自分の意志で「言語」を聞き取ろうとする。「内容」を知るため、自分の考えや気持ちを伝えるために、くり返し「言語」を使う。そのうちに、いつしか「言語」を覚えてしまうのである。

### 2. まとまりのある文章を書く「型」の指導

まとまりのある文章が書けるようになるには、次の3つのことを意識させることが大事だ。

- ①目的(何のために書くのか)
- ②相手(読み手が誰かを特定)
- ③自分らしさ(オリジナリティ)

これらのことを踏まえながら、「まとまりのある文章」が書けるようになる「型」を徹底する。

#### (1) 論理性を高める「型」

自分の考えや事実をつなげられなければ、まとまった文章を書くことは難しい。そこで、マインド・マッピング(Mind Mapping)を指導する。つなげながら、発展させ、順序立てていく方法を「型」として習熟させるのである。途中の段階では、枝分かれしていない部分(1本しか手がない箇所)を見つけさせ、「5W1Hの情報で広げられないか」と問いかける。

自分で書いたマインド・マッピングとペアの相手にインタビューをしながら、情報をつなげていったセマンティック・マッピング(Semantic Mapping)を比較してみることも有効だ。

前者は自分の言いたいことが、後者は相手が知りたいことが中心のマッピングになっている。2つを比べることで、自分が事前に想定できなかった「相手の関心」も見えてくる。「相手(読み手や聞き手)の立場」という視点が身につくと、構想にも幅が出てくるようになる。論理性を高めるとは、相手への説得力が増すということである。

#### (2) 段落構成を考えさせる「型」

段落構成(1つのパラグラフには1つの内容)では、次のような論理構成を教えたい。

- ①自分の意見(まず結論を述べる)
- ②理由(結論を導き出した根拠や事実を述べる)
- ③反論の予想(読み手の立場に立って、反論を予想し、それに対する自分の考えを述べる)
- ④まとめ(最後に再度結論を述べる)

これらの「型」を指導することで、一連の流れを自分でも意識できるようになる。

#### (3) 文をつけ足す「型」

「まとまった内容を書かせる時間がなかなか取れない」という話を聞くが、その前に、生徒への課題が「書きたい内容」になっているだろうか。

たとえば、「運動会の思い出を英語で書いてみよう」という課題は、「書かされる作文」である。こ

のような指示では、内容がほとんど同じになってしまう。伝える必然性がなければ、同じ体験をした相手に向けて、書きたい(伝えたい)という気持ちにはなれない。

しかし、この課題が「(帰国したALTに伝えたい)今年の運動会のハイライト・シーン」や「(クラスの仲間に伝えたい)運動会で見つけた小さな感動」ならどうだろう。相手が特定されると伝えたい内容が生まれてくるはずだ。「自分で選べる部分(自己決定)」があると、多様性も出てくる。自分らしさは書きたい内容につながる。

さて、文のつけ足し方だが、一定の「負荷」をかける必要がある。弁証法の「量質転換の法則」にもあるように、量が多ければ多いほど、質も高まるからだ。そこで、次のような課題を提示して「量(1文で終わらない)」に挑戦させる。

I have never been to ~. の英文を使って、3文で流れのある文章を書きなさい。

#### ①前に2文をつけ足した場合

My friend gave me some picture postcards.

They were souvenirs from his trip to Kyushu.

★I was very happy because I have never been to Kyushu.

#### ②前後に1文ずつつけ足した場合

“Karashi-mentaiko” is a specialty of Fukuoka and it is my favorite.

★However, I have never been to Fukuoka.

Someday I want to go there and eat it with a big bowl of rice.

#### ③後に2文をつけ足した場合

★I have never been to Kyushu.

I heard there are many good hot springs.

I want to go there with my family sometime.

文が3つ並ぶと、文と文のつながり(文脈)を考えるようになる。これは中2から中3にかけて丁寧に指導していきたい。中1では、and, but, becauseで始める文を1文つけ足すという指導からスタートさせるとよいだろう。

#### (4) 原文を修正する「型」

書き方がわからない生徒は、出だしからつまず

く。自己流で書き進める生徒もいる。机間指導には限界がある。そこでおすすめなのが、「こだわり作文 before & after」「肉づけ作文」と「要約作文」である。

「こだわり作文」では、順接の部分を逆接にしたり、主語と文の順序を入れ替えたりして、脈絡をいじった作文を与え、それを校正させる。

「肉づけ作文」では、原文(接続詞がなく、主語がIで始まる文ばかりを並べた、だらだらとまとまりのない文章)を用意し、読み手がひきつけられる文章に書き換えさせる。

「要約作文」では、50語程度の英文を30語程度に縮めさせる。まとまりのある文章が書けるようにするには、つけ足す指導だけでなく、このような縮約(大切なキーワードだけを残す)から要約(余分な部分をそぎ落として主要な骨格を残す)に至る作業も必要になる。

#### (5) つながりを作る「型」

一人ずつつながりを考えるのが難しければ、仲間と協力し合う方法がある。10個の英文を一人1文ずつ書いて、順に回していき、協力してつながりのあるストーリーを作るといったものだ。主語と動詞(または助動詞)の部分だけが書いてあり、残りは自由に書き込む。基本的な流れはできているので書きやすいし、書くときは最初から読むので、文脈も意識できる。グループで行う「リレーノート」やペアによる「紙上ディベート」なども同じ趣旨である。

### 3. 「考える時間」が確保された授業を

「まとまった文章」を書く指導で外せないのが、「編集・校正」を経験させることである。自分の書いたものを、一定期間寝かせてから、読み手になって校正させるという手法だ。この「自己修正できる」ことが「自己評価能力」につながり、段階的に「書く力」を高めていく。

このように、書くことは考えることであり、個人作業である。本来、考えることは楽しいことなのである。指導者はどの生徒も静かに考えて書くことができる授業を保証しなければならない。力がつくかどうかは、学習規律の徹底、授業のルール作りにかかっていると看做しても過言ではない。

## 書きたい！ 伝えたい！

— 語のもつ力の理解から表現力向上を目指して —

北海道中標津町立武佐中学校教頭 小崎 伸人



### 1. 「えーさくぶん!? えーっ!」

授業終了前に教室で投げかけた「明日は自分の趣味や興味のあるものについて英作文してもらいますね」という言葉への反応である。考えてみれば、国語科の読書感想文や主張発表文(弁論)ですら苦勞しているのに、英語で自分自身の考えを書かなければならないことへの拒絶反応が凄まじいのも当然である。実際に書かせてみると多くの生徒が、まずは日本語で文を作り、それを直訳しようと躍起になっていた。

そのような生徒たちが「書くことに慣れ親しみ、英語を用いて自分の考えなどを書く」ようになるまでに、どのようなステップを必要とし、どのくらいの時間が必要か。平成24年からの新学習指導要領施行を目前に控えた今だからこそ、中学校入学時に3年後のあるべき姿を描き、教科書の語句や表現を定着・活用する場面の設定や、文字を使つてのコミュニケーション能力の基礎を養う手立てを考え、「おもしろく、ためになる授業」を作り上げる準備が必要である。

### 2. 小学校英語

現在の中学校英語を語るうえで、小学校との連携は欠かせないトピックである。小学校では、もちろん「書く」領域については文字や単語も補助的な役割に留められているが、「気持ち、考えや意図を伝える」等がコミュニケーションの働きの例として挙げられている。中学校英語担当者として、それらがどのように展開されているのか、素地がどのように養われているのかを考慮に入れて授業を展開させていく必要がある。

ここ数年の間に、小学校外国語活動を参観させていただく機会に恵まれ、実際、英語に慣れ親しませるための歌の導入など、その有効性を再認識したり、新しく学んだりすることも多々あった。

今後、校区内小学校との連携を密にし、素地から基礎、そして発展へとつなげる5か年の連続した大きなビジョンを一緒に作り上げる必要もある。

### 3. 聴こう！ 知ろう！ 書こう！

#### (1) 歌

どの時代においても音楽に興味を示す生徒は多い。しかし現在は予想以上に洋楽を聴く生徒は少ない。当然のようにCM等で過去の名曲を耳にしても、それがどんな歌であるかを知らずにはしない。むしろ、オン・オフのスイッチがついているかのごとく音楽が流れていることに気づかない。

しかし、洋楽の歌詞の意味、語のもつ力、曲の背景を知ると、すんなりと心の中に落ち、積極的に歌う生徒たちを数多く見てきたのも事実である。そして、歌詞に使われている表現(この場合は既習事項)を用いて英作文しようとする生徒も少なくない。時として非常に簡単なはずの語や語句が曲の中で深い意味をもつこともあり、そこに視点を当てることにより、生徒たちの表現の幅は大きく広がる可能性をもっている。

#### (2) 単語の意味の核

“People talking without speaking  
People hearing without listening...”

(*Sound of Silence*, Simon & Garfunkel)

特に学力中位以下の生徒たちはtalkとspeak, hearとlistenにどのような違いがあるかがわからずに上記のような文に出くわしたときに混乱を覚える。相手が「伝えたいこと」を理解するためには語の核(語義)を知ることが大切であり、それは自分の気持ちを伝えるときに非常に役立つものとなる。

“If you fall I will catch you I'll be waiting  
Time after time...”

(*Time after Time*, Cindy Lauper)

この曲の中で注目すべき語はタイトルにも含まれるafterである。中学校1年生ではRepeat after me.として早々と覚え、その後、after school等の表現、接続詞としての役割へと続く。生徒たちは「後」という意味で習得するため、time after time, day after day等の表現にとまどう。これらの連語は、後の語が前を追って行くという性質を

理解するだけで、生徒たちの表現の幅は広がっていく。

教科書においても同様であり、単語自体がもつ力を理解することにより、生徒たちの「使える表現」は拡大していく。実際に洋楽の歌詞にもよく見られる、教科書(*Sunshine 3* 開隆堂)と重複する表現の例を次に挙げてみる。

#### ① look for ~

「探す」という意味に間違いはないが、forのもつ感情も含む包括的なイメージをとらえることにより、Rumi's uncle took her to Hiroshima to **look for** her parents.(Program4: A Red Ribbon)という文の切なさを感じさせることができる。

#### ② break

breakという語の核をとらえることにより、the mountain's heart suddenly **broke** (Program9: The Mountain That Loved a Bird)という文から山の悲しみの深さをイメージすることができる。

このように言葉のイメージができあがれば、あとは誰に何をどのように伝えるかという提示を数多く行いたい。

#### (3) ラブレター大作戦

以上のように歌や教科書の表現から、それぞれの単語自体が意味するものを理解すると、自分自身の内面を表現するまであと一歩となる。

それに最も重要なことは心に潜在する思いを言葉として顕在させることであろう。その最たるものは中・高生にとって愛の告白ではないかと考えている。もっとも最近では「ケータイ告白」が主流となりつつあり、言葉自体が軽く、ラブレターなど書いたことのない生徒ばかりである。しかし、悪戦苦闘しながらも、自分の好きな人を思い浮かべながら必死に書く姿が見られた。もちろん、思春期の真ん中に位置する生徒たちは当然のように照れも見られる。その場合は、もちろん好きな歌手や芸能人、架空の人物でも構わないことを告げておく。

生徒が苦勞して作り出したフレーズで、思い出に残っているものに次のようなものがある。

Please listen to my heart's voice. Can you hear me?

多くの生徒はI love you.を使って書いていたが、この生徒は見事にそれぞれの単語の意味をとらえ

ながら、直接的な表現を使うことなくラブレターを書き切ることができた。

また、教科書本文から表現を活用した生徒たちは、次のような文を作り出した(すべて3年生、括弧内は参照した課)。

I'd like to know more about you.(Pro.3)

I feel happy whenever I see you.(Pro.4)

Can you imagine the life without me?(Pro.5)

You make me happy.(Pro.5)

I was struck by you!(Pro.6)

時に「果たしてそれが告白か」と思われる文もあるが、伝えたい感情を表出させることが最も重要であると考えている。

#### 4. カメラ・アングル

受動態の導入時に「する側」と「される側」のアングル交換についての説明をすることがある。

ラブレターのような作文も「告白する側」と「告白される側」という関係が生じる。

一方向のみの伝達だけでなく、次にアングルを変え、自分の書いたラブレターに「受け入れ」と「断り」の返事を書く活動を行う。相反する感情の書き方を知ることは、コミュニケーション能力の基礎を築くうえで大切な過程の一つである。

#### 5. 「エーサク!? テーマは? 何? 教えて!」

書き言葉は正確性が求められる。日本語ですらケータイメールの誤解から友だちどうしが仲違いをすることもあるくらいだから、英語ではなおさらである。しかし、このような活動を続けることにより、英語で書く喜びや伝える喜びを覚え、教師の想定をはるかに超え、唸るような英文を目撃することができたり、生徒から上記のような反応が出たりしたときはまさに英語教師冥利に尽きる瞬間である。

ただ一点、調子に乗って定期テストに教科担任(つまり私)に対しラブレターを書けと出題したのは、やり過ぎだったと反省と後悔の日々である。

#### 参考資料

政村秀実, 河上道生.(1989).『図解英語基本語義辞典』  
桐原書店

## 授業時間(50分)の有効活用

— シラバスとショートタスクの活用を通して —

茨城県高萩市立高萩中学校教諭 和田 真一



### 1. はじめに

平成24年度からの新学習指導要領の導入に伴い、英語の授業は週4時間となるが、現在、公立中学校における英語の授業は週3時間が基本となっている。しかし、学校行事等で授業が削減される現状を考えると、この時数では足りないと感じている教師は多いはずである。この課題を解消するには、50分という限られた時間を最大限に活用し、授業を充実させることが必要不可欠である。どのようなタスクを与えるか、学習活動の構成(順序づけ)はどうかなど、事前の周到な準備が鍵となる。私はその具体的な手立てとして、シラバス(Syllabus)とショートタスク(Short Task)を活用している。

### 2. シラバス(Syllabus)の活用

シラバスとは、「教えるべき目標、内容、学習方法、指導方法、評価等の概要を示したもの」と定義されており、シラバスを活用することにより、教師も生徒もあらかじめ授業の全体構成や内容を知ることができるという利点がある。また、シラバスを作成する際には、より効果を高めるために各種ワークシートを併用している。各単元の第1時に、ワークシートを一緒に綴じ込んだ平均25ページ程度のシラバス(冊子型ワークシート集)を作成し、毎時間補助教材として活用している。その中には、シラバスはもちろん、ショートタスク(後述)で使用するワークシート、自己評価カード、そして家庭学習として取り組むワークシートなどを盛り込んでいる。また、基礎・基本の定着を目標としたワークシート、ゲーム的要素を含んだワークシートなど、バリエーションを豊富にすること

で生徒の興味・関心を高めるよう工夫している。さらに、英語が得意な生徒の学習意欲を満たすために、発展的なワークシートも積極的に取り入れ、与えられた課題を早く達成し、時間に余裕ができた場合にそれらに取り組むこととしている。これも最大限に時間を活用するための手立ての一つである。

*My Plan*  
~ UNIT 2 ~

UNIT	DATE	ACTIVITIES	POINTS	TARGET
Starting Unit	1	LET'S TALK	1	発音完了。発音・発音の練習を始める。
	2	MUSIC DICTATION	2	発音・発音の練習を始める。
	3	FAST INPUT	3	発音・発音の練習を始める。
	4	WRITING TEST	4	発音・発音の練習を始める。
	5	NEW WORDS	5	発音・発音の練習を始める。
Friday May 17th Saturday Sunday	1	TARGET 1A	1	発音・発音の練習を始める。
	2	TARGET 1B	2	発音・発音の練習を始める。
	3	TARGET 1C	3	発音・発音の練習を始める。
	4	LISTENING CHECK	4	発音・発音の練習を始める。
	5	SHADOW READING	5	発音・発音の練習を始める。
Monday	1	LET'S TALK	1	発音完了。発音・発音の練習を始める。
	2	MUSIC DICTATION	2	発音・発音の練習を始める。
	3	FAST INPUT	3	発音・発音の練習を始める。
	4	WRITING TEST	4	発音・発音の練習を始める。
	5	NEW WORDS	5	発音・発音の練習を始める。
Tuesday May 18th Wednesday Thursday	1	TARGET 1A	1	発音・発音の練習を始める。
	2	TARGET 1B	2	発音・発音の練習を始める。
	3	TARGET 1C	3	発音・発音の練習を始める。
	4	LISTENING CHECK	4	発音・発音の練習を始める。
	5	SHADOW READING	5	発音・発音の練習を始める。

### 3. ショートタスク(Short Task)の活用

実際の授業では、短時間の活動をできるだけ多く取り入れ、テンポよく実践するよう心掛けている。そうすることにより、生徒の集中力を高く保つことができ、学習効果も高まるからである。その短時間の学習活動をショートタスク(「short = 短い」+ 「task = 課題」)と名づけ、それぞれ約1

～3分という時間で実践している。実際の授業では、各種ショートタスクを単に羅列するのではなく、動的な活動と静的な活動を交互に取り入れることで生徒の集中力を高く保つよう心掛けている。具体的には、Speakingなどの活発な活動の後にはWritingなどのじっくりと課題と向き合う活動を取り入れ、「静と動」「緊張と弛緩」「緩急」のように、活動に変化をもたせることで授業にメリハリとテンポをつけるよう工夫している。ショートタスクを授業に取り入れてからは、生徒から「英語の授業は時間が短く感じられる」「50分間が充実している」「授業が楽しく感じられる」などの声を本当に多く聞くようになってきた。

### 4. 書く力の育成

もちろん、ショートタスクだけで授業を構成するのではなく、授業でポイントとなる場面では、じっくりと課題に取り組む時間を設けることも大切である。茨城県では、県が独自に作成している「学力診断テスト」を毎年実施し、その結果を分析して教師の指導力向上と生徒の学力向上を目指すという取り組みを行っている。その問題作成・分析に携わって5年目となるが、毎年感じるのは、まとまりのある英文を書くことを苦手としている生徒が少なくないことである。また、本校でも、自分の考えや気持ちなどを書いて表現することを苦手としている生徒が多い。これらの現状を踏まえて、最近ではこれまで以上に書く力を育むために時間を割くようにしている。

#### 【書く力の育成のポイント】

- ①生徒が関心を示しやすい場面を設定し、書くことを通して自分の体験や考えなどを表現する活動を多く取り入れる。
- ②基本的な語彙や文法・語順等の基本的英文構造の知識を定着させるために、スパイラルな学習を計画する。
- ③スピーチ活動などとも関連づけ、4技能を総合的に関連づける指導を工夫する。

### 〈まとまりのある文章を書かせる指導の工夫〉

これらの中で最も大切にしたい内容は、①の場面設定の工夫である。本年度の1学期には、前述したシラバスの中にマンガの吹き出しを活用したワークシートを取り入れて活用した。生徒は絵を見て状況を想像し、自由に吹き出し部分に台詞を記入していく。多くの生徒が生き生きと取り組む姿を見ることができ、場面設定の重要性を改めて認識することとなった。



イラストは<http://www.harkavagrant.com>より引用

### 5. おわりに

私は、初任校で懇切丁寧に指導していただいた石塚哲也先生、多様な情報や貴重な経験の場を与えていただいた鈴木裕一先生を個人的に英語の師と仰いでいる。その先生方に一歩でも近づきたいという目標をもち続け、これまで自分なりに努力してきた。改めて振り返ってみると、これまで多くの先輩や同僚から指導を受け、助言をいただき、よい刺激を受け続けたことで今の自分があると改めて感じる。それらの先生への感謝の気持ちを忘れず、今後も高い志をもち続けて日々の授業を実践していきたいと思う。



## 1. はじめに

授業中に、考えていることをたどたどしい英語で何とか伝えようとしたり、目をきらきらさせながら「この宿題、絶対してくるから」と言ったり、「この表現で伝わりますか」とノートを見せに来たりする生徒たち。それは私たちの目指す理想の生徒たちの姿です。しかし、自己表現活動に取り組ませても教科書の文のまねばかりで内容が深まらなかったり、日記やエッセイを宿題に出しても取り組んでこなかったりといった生徒の実態に、私はいつも悩んでいました。挙句の果てに、「そもそも表現活動は難しい。うちの生徒はそんなにレベルが高くないので、無理」と生徒のせいにして、表現活動を諦めていました。

しかし、ある程度まとまった量の英文を出力する場面がなければ、語彙や文法を活用する力も、まとまりのある文章を書く力も身につけることはできません。そこで佐賀県東部に位置する三神地区では、これまで行ってきた教科書の音読指導、文型習得のためのドリル、その文型を応用した単文レベルでの自己表現活動に加えて「input活動→intake活動→output活動」をスパイラル的くり返す指導法および指導過程を開発し「三神メソッド」と名づけて共通実践して、その効果を検証しました。

## 2. 指導過程「三神メソッド」

### (1) 「三神メソッド」とは

「三神メソッド」は、「Small Output活動」と名づけたintake活動や、定期テストごとのoutput活動を、活動への意欲を高める手立てを取り入れながらくり返す指導方法です。基礎的・基本的な知識を用いてまとまりのある文を産出する学習活動により、語彙や文法の理解・習熟・習得を図り、新学習指導要領が求める「活用する力」の育成を目指します。具体的には次の2つの活動を指導過程に位置づけました。

①教科書の本文理解と表現活動を関連づけた4つのSmall Output活動に、気軽に何度も取り組ませること。

②定期テストごとに出題する点取り放題形式の自由英作文問題を事前予告し、準備をさせたいうで取り組ませること。

### (2) 表現意欲を高める指導過程

「三神メソッド」では「型を教え、活動の様子を見取り、友から学ばせる」手立てを指導過程に取り入れ、表現意欲の向上を図りました。

①input活動終了後、教師がSmall Outputのモデルを示す。生徒はそれを受けてブレンストーミングを行い、Small Output活動に取り組む。

②教師はSmall Output活動によって産出された自作作品に対して、文法面・内容面・伸長面についてのfeedbackを行う。

③生徒は文法面・内容面のfeedbackをもとに自作作品をrewriteしながら、産出する英文の質と量の向上を自ら図る。

④教師は、生徒どうしがお互いに学び合ったり認め合ったり刺激し合ったりする機会として作品をsharingする場を設け、学習意欲を促進・向上・持続させる。

上記の指導過程を継続した結果、「もっと表現したい」という意欲が高まったり、友だちや教師から認められることによって「表現できる」という自信や自己肯定感が高まったりする様子が見られ始めました。

### 3. 4つのSmall Output活動

「三神メソッド」では、本文の音読活動や内容理解活動で得た「ライティングに必要なスキルの基盤的な部分」を活用するSmall Output活動にくり返し取り組ませることで、表現することの習慣化をねらいました。口頭表現活動の後には、発話の内容を必ずノートやプリントに書かせます。それに対して修正feedbackや伸びの見取りfeedback

を行うことで、口頭だけでなく文字情報でも成長や変容を生徒に伝えました。

授業では、教師が以下の①～④のSmall Output活動から生徒の実態に応じて1つ選択し、取り組みませます。期待する効果はそれぞれ異なりますが、どの活動においても、回数を重ねるごとに産出する英文数の増加が見られました。

#### ① Picture Describing

教科書のピクチャーカードや写真を用い、それについて自分の言葉で描写する表現活動。教師による本文のオーラルイントロダクションが生徒にとっての発話モデルとなる。本文の内容を文字情報だけでなく多面的に表示し、視覚や聴覚などに訴えるので、生徒たちは場面や登場人物の状況をイメージしやすい。

#### ② T or F Questions Making / Q&A Making

本文の内容やその背景となる情報、また類推される内容についてのT or F Questions, Yes-No Questions, Wh-Questions (Open Questionsを含む)などを作成し、解き合うことを通して、質問力や応答力、reasoning力などを身につけていく活動。また、Questionsを作る際に文法を強く意識しながら取り組ませるので、言語文化に関する知識の整理と習得にも役立つ。

#### ③ Read Between the Lines and Write

本文の行間に込められた内容や背景の情報を汲み取って、自然な流れの対話文になるように行間に書き加える活動。既習・未習の知識を総動員して活動するので、活用力が涵養される。活動を通して、友だちの考えを聞きたい・知りたいという積極的な態度の高まりも目指す。

#### ④ Reproduction and Comment Writing

本文の要点をまとめたmapping等を見ながら、教科書本文を自分の言葉で再現したり、要約したりする活動。初期の段階では本文の内容を再現することが主だが、本文の要点を自力でとらえ、自分の言葉でreproduceしたり、自分の意見や感想を述べることをくり返したりすることで、要約力や表現力を高めることを目指す。

#### 4. 学力面と意識面の変容について

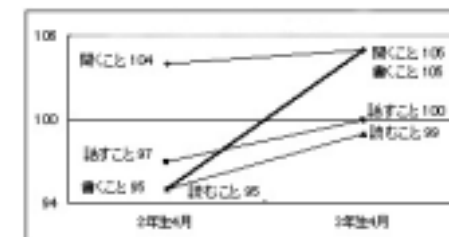
平成21年度の2、3学期に三神地区14校すべて

#### 〈まとまりのある文章を書かせる指導の工夫〉

の学級で「三神メソッド」を1回以上実践し、意識調査を行いました。

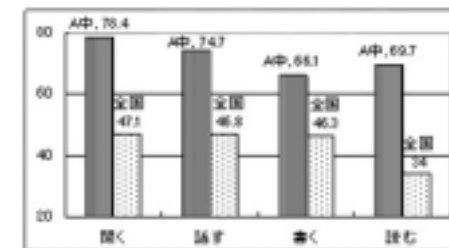
地区内のA中学校3年生(H21年5月より「三神メソッド」を先行実施)におけるNRT検査結果を経年比較してみると「書くこと」について10ポイントの顕著な伸びが見られました(図1参照)。

図1. A中学校NRT経年比較(現3年生191名)



ベネッセ教育研究開発センターが2009年(中2, 2,967人)に行った「第1回中学校英語に関する基本調査」とA中学校の生徒(中2, 199人)のアンケート結果を比較すると、各項目とも「学習活動が好き・おおむね好き」と答えた生徒の割合が、全国の結果に比べて大きく上回りました(図2参照)。

図2. あなたは次の活動は好きですか



## 5. おわりに

本稿では、「三神メソッド」のSmall Output活動に特化して実践の一端を紹介しました。本研究の詳細については、佐賀県中学校英語教育研究大会(10月18日開催)で公開授業ならびに事例発表を行い、生徒作品の具体的な変容、定期テストにおける自由英作文、その他の意識の変容等について具体的に報告します。

#### 参考文献・参考資料

- 松沢伸二.(2009).『「活用する力」を英語科でどう育てどう評価するか』「指導と評価」日本図書文化協会
- 工藤洋路.(2009).『習熟度別に見る英語学習の実態と英語に対する意識の違い』「第1回中学校英語に関する基本調査報告書【教員調査・生徒調査】」ベネッセ教育研究開発センター
- 三浦孝 他.(2006).『「ヒューマンな英語授業がしたい!」研究社



## クイックQ&Aの活用

—基礎・基本の定着を図る—

石川県金沢大学附属中学校教諭 端崎 圭一



### 1. 私のビジョン

現行の中学校学習指導要領の外国語の目標に「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」とあります。英語教師はこの抽象的な目標から、生徒たちが中学3年間でどのような姿に育ってほしいのかという具体的なビジョンをもって、授業に臨むこととなりますが、私のビジョンは、「中学卒業時にはSmall Talkを2分間積極的に継続して行うことのできる生徒に育ってほしい」というものです。

### 2. 基礎・基本の習得を目指した活動

このビジョンを実現するためには、まず、基礎・基本を生徒にしっかり習得させておかなければならないと考えます。そのために私が行っている実践が3つあります。BINGO, Dictation, そして、クイックQ&Aです。はじめの2つの活動は、長勝彦先生(武蔵野大学)が、十数年前に本校で模擬授業を行われた際に教えていただいたもので、『英語教師の知恵袋』(開隆堂, 1997)に詳しく載っています。クイックQ&Aは、教科書Sunshine(開隆堂)の巻末資料「文法のまとめ」にある活動です。BINGOは1年生の最初から、クイックQ&Aは言語材料がある程度蓄積してくる1年生後半から、Dictationは前の学年の教科書を使用するので、2年生からスタートします。3つの活動がそろった2年生では、毎時間、開始約15分をこれらの活動に使います。これを卒業まで継続して行います。継続は力なりです。

### 3. クイックQ&A用ワークシート

クイックQ&Aについては、教科書のものをそのまま使用しても十分活動はできますが、本校の生徒の実態に応じて継続的に活動させるために、私はオリジナルのワークシートを作成して授業に臨んでいます。

1枚のワークシートに疑問文(Q)と答え方(A)のセットを15題用意します。この15題を6回の授業でくり返し取り組ませます。活動を始める前に正しく答えられる目標数を各自に決定させ記入させます。活動では、ペアの一方が出題し他方が答えるのですが、15題で1分半という時間制限が生徒の意欲を引き出すのに妥当な時間のようです。活動が終わって目標数をクリアしたら「達成くん」というキャラクターに目を入れるお楽しみも加えました。ワークシートを自分で作成することは、出題する疑問文を授業の進度に応じてスパイラルに入れ込むことができますし、その場で判断しないと答えられない疑問文なども工夫次第で入れておくことができるのでおすすめです。たとえばこの活動をしているとき、立ったり歩いたりしている私についてたずねさせる疑問文“What is Mr. Hashizaki doing?”を入れると、私を見て答えを考えなければならないので効果的だったりします。実物は、本校のホームページの教科研究(英語)にアップしてあります(<http://partner.ed.kanazawa-u.ac.jp/futyu/>)。

クイックQ&Aを数年間実践してみて感じることは、どの生徒も積極的に声を出して取り組むということです。これには私自身も驚いています。英語が得意な生徒は時間内に正確に目標を達成しようという意欲が、一方、不得意な生徒にとっては答え方がわかるという安心感が、積極性を引き出していると考えられます。

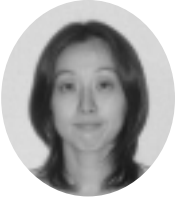
### 4. 今後の課題

クイックQ&Aで言葉のキャッチボールに慣れておくと、冒頭に挙げましたSmall Talkへの導入がしやすくなります。もちろん、最初は30秒程度からのスタートになります。今後の課題は、導入をよりスムーズにするために、脈絡のない疑問文が続くことの多いクイックQ&Aの疑問文に、前後の関係性をもたせることだと考えています。



## 和訳先渡しのおすすめ

大阪府大阪市立董中学校教諭 有賀 仁美



### 1. 今は昔

思い出す。ちょっと太った男の先生を。高校時代の英語の時間を。あの先生はダルと呼ばれていた。1つは、ダルマみたいな体型だから。2つ目は、授業がダルい、dull(退屈な)だから。学生は我が身を棚に上げ、残酷に辛辣に批判的だ。今、自分がこちらの立場に立って初めてわかる。ひどい。先生すみません。その反省とともに、しかし、あえて書かせていただきます。

先生の授業は、ずっと文法訳読でした。一つひとつの語の意味は辞書を引けばわかりますが、それをまとめて訳すという作業には、そのための技術と日本語力が必要です。何行かずつ順番に指名されるので、自分の担当のときは、前夜に意味を調べて準備していましたが、なかなか時間のかかる大変なものでした。その努力の分、勉強になりましたが、他の人が当たっている日は、何の予習もせず、授業中も何も考えず機械的にノートを写したり、時には寝ていました。先生、改めてすみません。

どのような授業であれ、悪いのは真剣に取り組んでいなかった私自身であり、文法訳読を悪者にするつもりはまったくありません。文法訳読が必要な場面も必ずあります。しかし、同じことのくり返しはマンネリになり、かつての私のような生徒を生む原因になるということは言えるでしょう。

### 2. 音読は大切!

「中学校で使われる教科書の英文をすべて覚えたらいい」と言われるくらい、中学校3年間で習うことは基本的で大切なことばかりです。覚えてほしいという私たち教師の思いは伝わっているでしょうが、生徒たちは覚えることに苦労します。

どうしたら覚えやすいか。その1語・1文だけを覚えるのではなく、前後の文も含めて内容や状況がイメージしやすく、何かとのつながりから覚えたり思い出したりできることが、1つのポイン

トでしょう。

そのためには、文章の内容を理解したうえでの音読が効果的です。授業の中で、音読の時間やその他の活動に十分な時間をとりたいものです。

ただ教師の後に続いて読ませるだけが音読ではありません。私も、文章の形態に応じて、またそのときの生徒の様子に応じて、いろいろな方法を組み合わせ工夫して行っています。

しかし、「時間が足りなくて十分に音読や活動ができない」と思われている方もいるかもしれません。

### 3. 和訳先渡しのおすすめ

そこでおすすめしたいのが、和訳先渡しです。英文理解の時間を短縮し、音読やその他の活動の時間を増やすことができます。ノートに貼ってまとめておけば、生徒たちが家に帰って復習しやすく便利です。テスト前には、その日本語を見て英文が言えるか・書けるかなど、テスト勉強にも使えます。何より、英語の授業なのに、話しているのも書いているのも日本語という状況を変えることができます。

一つひとつの語句の意味や用法を確認したい場合、和訳の中にいくつか空欄を作り、穴埋め問題にすることもできます。また、この文はしっかり説明したいというならば、その1文を空欄にしておいて、授業で確認することもできます。

和訳の提示の仕方も工夫できます。全訳をそのまま渡すこともできますし、フレーズごとに改行したりスラッシュを入れたりして、日本語としては違和感がありますが、そのかたまりで提示するやり方もあります。

ぜひ一度お試しください。また、「このページは文法訳読、このプログラムは和訳先渡し」のように使い分けて工夫してみてください。

## 第58回 中村英語教育賞 入選論文発表

第1位：高校段階の自由英作文指導における論理的表現力の育成を目指した取り組み  
広島県立安古市高等学校 久山 慎也

第2位：中学生を対象とした第二言語語彙習得に対するフラッシュカードの影響  
群馬県安中市立松井田東中学校 福田 昇

第3位：JTEが英語で授業をする意義  
—高校入門期における生徒の意識・学習効果の変容について—  
石川県立金沢桜丘高等学校 前田 昌寛

### ◆ 審査員 ◆

佐野 正之(審査委員長・横浜国立大学名誉教授)

山岡俊比古(同副委員長・兵庫教育大学教授)

白畑 知彦(静岡大学教授)

高梨 芳郎(福岡教育大学教授)

萬谷 隆一(北海道教育大学札幌校教授)

## 概 評

審査委員長 佐野 正之

今回は6篇だった応募論文が、今回は10篇に増加し、質の高い研究が多く寄せられました。よりよい授業作りには、高い技能と精力的な実践が大切ですが、その一方で自分の授業をresearcherの目で省察することも必要なことは言うまでもありません。今回の審査を通して、日本にもこうした発想が根づきつつあることが感じられ嬉しく思いました。

審査委員は全員で10篇の論文を精読し、テーマの「独創性・発想力」「内容の充実度」「構成力」「表現力」「応用性・実用性」などの観点から一次審査と二次審査を行い、上記の3篇を入選としました。いずれも問題意識が明確で、文献研究で論点を明らかにしたうえで妥当な調査を行い、結果を論理的に考察して論じており、現場での教師による調査研究として高く評価されたものです。また、その評価結果に審査委員の意見の一致が多いことも今年の特徴でした。

残念ながら受賞できなかった論文も、テーマとしては興味深いものがありました。ただ、「指導の工夫の羅列にすぎない」とか、「アイデアはおもしろいが、言葉の定義が厳密でなく、文献研究も不足して

いる」などの欠点が指摘されました。

一方、第1位を得た久山論文は、自由英作文で論理的な表現力を伸ばす指導を扱っていますが、用語の定義が明確で文献研究も実践も充実していて、審査委員全員から高い評価を得ました。第2位の福田論文は、誰もが利用するフラッシュカードの影響を、緻密な実験的な手法で調査した点が評価されました。ただ、授業への応用となると限界があるという指摘もありました。実験の結果を授業実践で確認するという2段階にすればさらに説得力が増したと思われる。第3位の前田論文は、「授業は英語で行うことを基本とする」という高等学校指導要領の改訂を受けて、日本人教師が英語を話すことが生徒の意識や学習に及ぼす影響を論じていて、非常に興味深いものですが、調査方法や期間に改善の余地があるのではないかと指摘がありました。

最後に多忙な中、ご応募くださった皆さんに敬意を表すると同時に、研究と実践を結びつけるResearch Mindをもった教師がますます増加することを祈念して総評を閉じます。

## 講 評

審査副委員長 山岡 俊比古

この講評では、入選した3つの論文について、それぞれその内容を解説し、評価結果について説明します。最後に、受賞に至る優れた論文を書くためのアドバイスも行います。

### 久山論文

〈内容〉

本論文は、著者が教える高校生の書く自由英作文を見ると、語数が少なく、文法・語法的な誤りが多く、論理がずれていたり、論拠が欠けているものが多いことを踏まえ、英語で論証文を書くための指導を1年生の2クラス78名に対して3か月かけて行い、その効果を検証したものです。

指導は、英語Iの授業の最初の10～15分を使って合計20回行われました。指導の観点とその指導回数およびそれぞれの指導において行われる活動から導かれる本研究の仮説は次のとおりです。

- ・誤文訂正活動(文構造上の誤りを直す活動)8回  
→**仮説4**：文構造上の誤りが減少する。
- ・早書き訓練(制限時間内に量を意識して書く活動で、主題はそのつど異なる)5回  
→**仮説1**：生徒は30分で100語の英文を書けるようになる。
- ・論理トレーニング(論拠の必要性、主題文と結論文の書き方、becauseの誤用指摘と理由提示の表現法、譲歩を使った議論における逸脱解消法)6回  
→**仮説2**：主張、根拠、主題文、結論文の出現頻度が高まる。  
→**仮説3**：譲歩を伴う議論の逸脱が減少する。  
→**仮説5**：becauseの誤った用法が減少する。
- ・書き直し(最後の早書き訓練の主題「日本におけるクリスマス祝いの是非」の内容に関する教師からのフィードバックによるもの)1回  
指導の効果は事前テスト(「小学校英語の是非」を主題に書いたもの)と事後テスト(「中学生の携帯電話携帯の是非」を主題に書いたもの)の比較でなされており、その結果、仮説1, 2, 5は検証されたが、仮説3, 4は検証されなかった。

著者は仮説3に関しては、個人差の大きさと、作文の主題による影響を指摘し、仮説4については、生徒がより統語的に複雑な文を書こうとした結果である可能性を示唆しています。

〈評価〉

この論文は審査員全員からきわめて高い評価を得ました。論文の目標、関連文献研究、実験デザイン、結果が一貫していて、説得力があり、とりわけその目標が文法・表現レベルに留まらず、根本的な論理性に関わっている点が評価されます。

ただし、事前事後の比較には、U検定ではなく、サイン・ランク検定などを使用すべきでした。また、「これだけの成果が生まれるかについて少し驚いている」との審査員の指摘もあり、遅延事後テストのデータも合わせて議論されていればもっとよかったと思われます。

### 福田論文

〈内容〉

この論文は、中学生の英語語彙学習におけるフラッシュカードの使用効果を実験的に調べたもので、以下の2つの課題をもっています。

- (1)フラッシュカードの使用は語彙リストを使用する場合よりも効果的かどうか。
- (2)フラッシュカードを使う際、提示順序として「英語 → 日本語」と「日本語 → 英語」のどちらが優れているか。

効果の確認は、語の意味の記憶保持の程度として、直後、2日後、8日後にテストによって測定されました。実験の参加者は、課題(1)では、中学2年生54名、3年生67名で、課題(2)では、2年生41名、3年生43名でした。

課題(1)の結果は、直後テストではフラッシュカード群と語彙リスト群で差はなかったが、2日後と8日後のテストにおいてはそれぞれ差が生じ、フラッシュカード群ではほぼ成績を維持したのに対し、語彙リスト群においては成績が有意に低下した。

課題(2)の結果は、提示順序による差はないこ

とを示した。

課題(1)の結果についての考察で著者は、まず単語とその意味を1枚の紙で同時に見る語彙リストに比べ、フラッシュカードではカードの裏面に意味が書いてあるため、学習者は記憶から単語の意味を想起しなければならず、それだけ想起する学習が多くなると述べています。さらに正書法として視覚情報への依存を促す形態の文字をもつ日本人英語学習者には、視覚情報を活性化するフラッシュカードを用いた学習法が向いている可能性があるかと述べています。

〈評価〉

教室でよく使われるフラッシュカードの利用が語の記憶定着に効果的であるということ、実践的調査によって確かめた研究として、この論文は審査員全員から好意的な評価を得ました。しかしながら、紙幅の関係もあったと思われませんが、実験方法が十分に説明されていない<sup>うらみ</sup>憾みがあります。それぞれのやり方でどの程度時間をかけたか、どのような語を扱ったか、3回の記憶保持テストの形態はどうかなどは知りたいところです。

## 前田論文

〈内容〉

本論文は、新高等学校学習指導要領における「授業は英語で指導することを基本とする」という規定を先取りし、著者の勤務校創設の科目である「英語コミュニケーション」を英語で授業する取り組みを紹介し、1年生三百数十名を対象として、以下の4点を明らかにすることをねらったものです。

- (1) 生徒の意識はどう変容したか。
- (2) 生徒のoutputの質と量はどう変化したか。
- (3) JTEの授業とALTの授業はどう違うか。
- (4) JTEが英語で授業する意義は何か。

(1)については、英語で行う授業に対して、当初は68.7%の生徒が抵抗感をもったのに対し、3か月後にはそれが25.5%に減った。

(2)については、本文を読んでそれに関する自由記述文を分析対象としているが、2か月経つと、1文あたりの量が増え、6か月後には、書く速さと量に大きな変化があった。

(3)に関しては、授業開始3か月後の生徒の授業

評価によると、ALTは理解可能なinputを与えていない場合のあることが確認された。

(4)については、生徒の変容、意欲、学習効果のそれぞれにおける好転として表れるという意味においてその意義があるとする。

〈評価〉

この論文はALTの授業との対比も含めてJTEの英語による授業を分析している点で興味深く、それなりの評価を得ました。しかしながら、ねらいの4点が拡散的で、審査員にねらいが不明確、学校での取り組みの紹介記事のようといった印象を与えました。

また、生徒のoutputの質と量の議論は個別事例をもとにしたもので、対象の生徒全体に当てはまるか否か疑問が残ります。また「実感として、日本語で行っていたときよりも、生徒は授業に集中するようになった」という記述は、印象論的で、論文としては避けなければなりません。

新学習指導要領のこの規定のねらいは、英語をコミュニケーションとして使うというあるべき姿を実例として示すことにあり、教師の「英語を使うモデル」としての役割にその意義を関連づけて議論する必要があったと思われる。

## 論文執筆のアドバイス

よい論文を書くためには、とりわけ以下の点に心掛けてください。

- (1) テーマの選択に当たっては十分な絞り込みが必要です。テーマが大きすぎるもの、漠然としたもの、複数にわたるものは避けるべきです。
- (2) 論文は論理によって構成します。すっきりと筋の通る論立てと、論理的な文章表現が必要とされます。関連する先行研究を読むことはその練習にもなります。
- (3) 統計を使う際には、使うべき処理法とその結果の表記法とも、専門家のチェックを受けることが望まれます。

※各入選論文につきましては、開隆堂出版webページにて掲載しております(<http://www.kairyudo.co.jp>)。

# 英語教師の裏ワザ

## 教科書は教材の宝庫, recycleしよう!

東京都江東区立深川第一中学校教諭 原田 博子

教科書の扱いを新出文型の導入と練習そして本文内容の理解と音読練習で終わりにしてはいませんか。英語は一度触れただけでは定着しません。英語の力をつけていくには活動に変化をつけながら既習事項に何度も触れる機会をもつことが必要です。そこで生徒にとって一番身近な教科書の活用法について考えてみましょう。

### 1. 「文型のまとめ」やQ&Aの利用

それまでに学習した言語材料をある時期に整理することによって、理解が一層深まります。教科書の「文型のまとめ」で取り上げられている文をそのまま利用したり、教師がつけ加えたりして英文リストを作り、帯活動の時間にペアで練習させます。2年生の1学期には、1年生で学習した一般動詞の過去形に加え、be動詞の過去形、過去進行形、未来形を学習するため、これらの文の定着が不十分になりがちです。そこで、1, 2年生の「文型のまとめ」を活用し、毎時ペアで練習させたところ、生徒には好評で、徐々に文の使い方が定着していきました。

〈文型のまとめ〉リストの例(2年生6月使用)

1. 私は今日忙しい。  
I am busy today.
2. 私は昨日忙しかった。  
I was busy yesterday.
3. 私は明日忙しいでしょう。  
I will be busy tomorrow.(後に続く)

教師と生徒間あるいは生徒間でQ&Aが成り立つことは授業で必須です。Q&AはSmall Talk、新文型や本文内容を導入するときのOral Interaction、本文内容理解、Chat活動など授業のいたる場面で行われます。そこで、Q&Aの練習を1, 2年生の時期に、帯活動の時間などを使い、ペアで行います。*Sunshine 1, 2*(開隆堂)は巻末にQ&Aのリスト(クイックQ&A)が用意されているので、授業ですぐ活用できます。Q&Aの練習のページがない教科書では、これまで出てきたQを教科書から拾い出し、それらをまとめてリストにして、帯活動

の時間を利用して、ペアで練習させます。片方がQをして片方が答えるといった練習から始まり、慣れてきたら、1文足して答えたり、相手の答えに“Really?,” “Wow!” “Sounds interesting.”などで応じたり、相手にも質問を返すなどして、一方通行のQ&Aから徐々に会話に広げていく練習をしていきます。

### 2. Dictation Testに利用

すでに学習したレッスンから毎時間1ページずつDictation Testを行います。事前にテストするページを予告し、生徒はそこを何度も読んで、書いて準備するので、忘れていた英語を思い出し、以前より確実に英語を頭に残すことができます。やり方は、教師が本文を順に読んでいき、最後に読んだ文を書き取らせませす。既習の文の書き取りテストであっても、どの文を書き取るのか最後までわからないので集中して聞かなければなりません。早く書き終わった生徒には、「a」で始まる語を書きなさい、「動詞を書きなさい」、「夏に関する語を書きなさい」などカテゴリーを与えて、Dictation Sheetの余白に書かせます。テスト用紙回収後、答えを板書し、文の一部を消して、その文を再現しながら発音させたり、間違えた答えを板書し、訂正させるなどして、文を正確に意識させます。Dictation Sheetは専用のノートに貼り、間違えた文は5回以上書かせます。

### 3. Picture Describingに利用

教科書本文にある絵をDescribingするために使えます。未習、既習、どの絵も利用できますが、既習の絵を使った場合は、生徒のOutputからどんな語や表現が定着したのかがわかります。人物の動作は現在進行形を使う(He is running.)、絵の中にあるものを紹介するときはThere is / are ~.を使う(There is a sofa.)、表情はlookを使う(He looks happy.)などといった表現の仕方を指導すると生徒がOutputしやすくなります。

素材豊富な教科書を再利用するという観点から教科書を活用してはいかがでしょうか。

## LET50年から学ぶ

今年の外国語教育メディア学会の全国研究大会は、「外国語教育とメディアの更なる共生を目指して—LET50年からの提言」という大会テーマを掲げ、設立50周年記念大会として、8月3日から5日まで、横浜市立横浜サイエンス・フロンティア高等学校で開催された。

会場では、50周年記念誌が会員全員に配付され、過去50年間の学会の変遷、特にテープレコーダーからコンピュータへと目覚ましい発展を遂げた教育メディアを活用した外国語教育の歴史を懐かしく思い出される先生や、まったく初めて認識される先生がおられ、学会の50周年はさまざまに受け止められていた。

外国語教育メディア学会は、1961年に語学ラボラトリー協会(The Language Laboratory Association of Japan: 略称LLA)としてスタートし、語学ラボラトリー学会、そして2000年に外国語教育メディア学会(The Japan Association for Language Education and Technology: 略称LET)へと名称変更しながら、半世紀にわたって日本の外国語教育を牽引してきた。

訳読偏重の英語教育から、音声教育を重視して「聞く力」、「話す力」を養成する切り札としてLL(Language Laboratory)はおおいに期待され、その普及にLLAは大きな力を発揮してきた。学会初期の主な研究対象は、LL環境整備やLLを活用した授業、さらにLL教材の作成方法などであった。

時代は変わり、コンピュータが人々の暮らしを大きく変えていく中で、LLは徐々に姿を消し、視聴覚機器とコンピュータを備えたCALLやインターネット等を利用した教育などに研究や実践の重点が置かれるようになると、次第にLL教育が中心と連想されるLLAという学会名称が問題視されるようになり、2000年に現在のLETに改称することになる。その後の10年間に、学会の研究分野は多様化し、研究対象も従来の中学生から大学生に加えて、小学校の学習者へと拡大していった。

「新しい」英語教育がスタートして50年が経過したこの節目の年に、LET50周年記念大会に参加して改めて感じたことは、外国語教育学という学問

分野が定着し、大きく発展したという事実である。大会発表要項にある研究・実践の質は確実に高くなり、研究・実践の成果の影響も強くなっていると確信した。

一方、学習者の英語力や異文化理解能力は、この50年でどの程度変化したのだろうか。50年前と現在の学習者を比べようはないが、教授法と学習環境の改善から、現在の学習者が受ける効果に疑問を感じてしまうことが度々ある。英語が「できる・できない」や「好き・嫌い」で学習者が分断されるのを防ぐのは不可能かもしれないが、分断される時期が早くなり、さらにその差が拡大しつつあるように見受けられる。

この7月に発表された産業能率大学のグローバル意識に関する調査(2010)は、今年度の新入社員の49%が海外勤務に否定的で、積極派は27%だったと報告している。海外否定派の主な理由は、「リスクが高い」、「能力に自信がない」、「魅力を感じない」で内向きの意識が顕著である。英語力や異文化理解能力の有無のみが原因とは言えないが、海外志向の強弱において、人材の二極化が進んでいるのは確かな傾向のようで、グローバル意識の低い海外否定派の増加は、人材の「ガラパゴス化」(世界標準から掛け離れる現象)と危惧されている。

来年度から小学校での外国語活動が完全実施され、日本の英語教育はまったく新しい局面に入る。このような時期にこそ、外国語教育の本質を見据え、これからの方向性を定めるために、過去50年間の外国語教育を振り返り検証することが必要ではないかと思う。

(熊本大学教育学部准教授 島谷 浩)

## 参考文献

外国語教育メディア学会(編).(2010).『外国語教育メディア学会50年の歩み—LLAからLETそして未来へ—』東京：金星堂。

学校法人産業能率大学.(2010).『第4回新入社員のグローバル意識調査』<http://www.sanno.ac.jp/research/pdf/global2010.pdf>(最終アクセス2010年8月16日)

## 投稿を歓迎します

英語教育に関する問題提起、実践報告、研究などの投稿をお待ちしております。締切は特にありませんが、本誌は今後、2011年1月、3月、5月、9月にそれぞれ発行の予定ですので、原稿到着の時点で掲載号を決めさせていただきます。規定は以下のとおりです。ご不明の点は編集部までお問い合わせください。

- ① 22字詰×72行以内(本文分量)
- ② 二重投稿はご遠慮ください。
- ③ 採用分には薄謝を呈いたします。